

スタディーツアーに参加して

明治大学 文学部 3年

<人と人との関係が大事>

インドネシアに出発する前から三木さんに「佐久川くんは肌の色が黒いから現地のひとにまちがえられるかも知れないね。」と言われていました。亜熱帯の沖縄出身である私は、東京に来て以来、黒い黒いと冷やかさることははっきり慣れきっており、ポロブドゥール遺跡に現地の人にまぎれて安く入園することに成功した彦坂さんの武勇伝も聞いていましたから、そんな三木さんの予言をわたしはポジティブに捉え、「おお、じゃあむしろインドネシア人になりきってやろうじゃないか」と意気込んでいました。

旅先では、想像以上に多くの人びとが私をインドネシア人と間違えてくれました。はじめて泊まったバリのホテルで当たり前のようにインドネシア語で話しかけてきた従業員さん。上空1万メートルを飛行する機内で、「ア—ユーインドネシアン？」と聞いてきたガルーダ航空のCAさん。探検家のような格好をした豪州人に大変流暢なインドネシア語で道をたずねられたこともあります。

旅の当初はそんなエピソードを指折り数えていたのですが、両手を動員しないとカウントできなくなるころには面倒臭くなって数えるのをやめてしまいました。ためしに他の大学生に聞いてみたところ、そんなことは一度もなかったそうです。

インドネシア語をほとんど勉強せずに行ったため、私は必然的に「体を張ったコ



交流会で、APEXのインターン生として紹介されました

ミュニケーションをとる」ことを試みるようになりました。訪問した村で、村長さんから繰り出された無茶ぶりに応え、地元の人がつかう温泉にもパンツ一丁で乗り込みました。私の肌黒さにインドネシアの人々は親しみをおぼえてくれたようで、どこへ行っても彼らは私を温かく迎え入れてくれました。言葉は理解できなくても、温かい歓迎の姿勢を肌で感じることができました。以上のように現地の人々の温かさを覚えた経験から、私はインドネシアという国を好きになりました。インドネシアの人々に親和を覚え、歴史に敬意を払うことができるようになりました。それは非常に個人的な感情です。

しかし、その「個人的にインドネシアが好き」という感覚をもつことはとても大事なことだと考えています。なぜなら、そのような好意的態度を国民レベルで醸成することが最終的に国同士の友好関係を構築する決定打となるからです。

日本と韓国の例をあげて説明しましょう。日本と韓国は一衣帯水の隣国同士であり、戦後ずっと仲が悪かった。国交を正常化さ



砂糖ヤシでつくった地酒(モケ)をイッキ飲み

せるため両国の政官財とトップレベルの合意やアメリカの積極的仲介があったにもかかわらず、和解には大変長い時間がかかりました。そして結果的に日韓の和解を象徴したのはワールドカップの共催であり、「シュリ」や「JSA」のような映画であり、「冬ソナ」に代表される韓流ブームでした。「個人的に韓国が(日本が)好き」という意識があちらこちらで芽生え、結果両国の風通しは非常に良い状態になった。そこから見えるのは、宥和を牽引するのは政治や外交でなく、国民感情レベルの親和と敬意だということです。

外国に出かけ文化歴史に親和と敬意をおぼえること。そのような個人レベルの草の根外交は、実はトップレベルの交渉や政治的根回しよりもずっと重要で、世界の現状を改善する契機になるのかもしれない。わたしはこう考えています。

今回のスタディーツアーの参加者はみな、つい最近まで数ある外国のひとつでしかなかったインドネシアを身近に感じるができるようになったと思います。ニュースでインドネシアという単語が飛び出せば、今までよりずっと敏感に反応するでしょう。わたしもそんな人間のひとりです。

インドネシアを親身に感じる人間をひとりでも多く増やすこと。それがインドネシア

と日本の平和につながり、ひいては世界の平和を導くことになるはずだ。今回のスタディーツアーでわたしはそう確信を得ることができました。

<インドネシアでよみがえった大学の講義>

今回のスタディーツアーでは、APEXがインドネシアで展開するプロジェクトの現場を実際にいくつかまわることができました。そのなかで「排水処理事業」は今でも印象につよく残っています。

APEXの排水処理事業では、その地区の状況にあった技術開発だけではなく、住民が費用を負担し、管理する運営システムが形成されています。

現場を視察する前に、住民参加型の運営がいかんにして形成されたか説明を受けました。どのようにして交渉をすすめたかの説明を受けたとき、私はそのなかに「コミュニティ・リーダーに協力をお願いする」という項目があるのを発見し、ひとり感激していました。

これは「ピア・エデュケーション(peer education)」そのものじゃないか。

「ピア・エデュケーション」とは教室運営の方法のことです。それは、教師がすこし力のある生徒、昔で言えばガキ大将的存在の生徒に問題解決に協力してもらう方法です。「あいつのこと心配だから、ちょっと注意して見ててあげてよ」「あいつに勉強教えてやってくれない」と働きかけることでクラスをいい方向にもっていくことができます。

「ピア・エデュケーション」は教職課程の授業で取り上げられた方法論ですが、ど



クリチャック地区の排水処理施設視察

うやらそれは教育現場に限らず、人間関係を構築するうえでも非常に効果的なアプローチ方法であるようでした。

プロジェクトを進めるには、住民との信頼構築をはじめとして、合意の取り付けや環境教育等も必要であることは想像できます。そのため、住民の力関係を利用した「ピア・エデュケーション」のような方法が効率的とは思えます。ところが、話によると、ある地区のキーパーソンと住民との関係が良くなく、プロジェクトの進行を遅らせる方向に働いたこともあったようで、机上のイメージほど簡単なものではないのだな、ということも認識しました。

<国際協力の難しさ>

ツアー5 日目に訪れたシッカ村で、「ルフィ」という名前の男の子に会いました。私はルフィに国際協力の難しさを教わりました。

シッカ村には教会がありました。中に入ると、10歳前後の子どもたちが20人くらいグループをつくっていました。勿論なにを言っているかわかりませんでした。ニコニコしながら近づいていって、なんとかコミュニケーションをとろうと画策しました。彼らが座っているイスの隣に腰掛け、視線を落として話しかけると、子どもたちのほうも少しずつ私に興味をもってくれました。

ノンバーバルなコミュニケーションで慣れてきたとき、ルフィが私に向かって、「pen」と単語をひとつ発しました。シッカ村では日本ほど文房具が潤沢にあるわけではありません。自分のノートを教会にまで持ってきて、大事そうに抱え込んでいた子もいました。

話しかけられたとき、私は「ああ、ペンを貸して欲しいのか」と早合点してしまいま



シッカ村の子供たちと一緒に

した。「money」と言われたらとてもそうは思わないはずなのに、なぜでしょう。私はルフィにペンを一本手渡しました。するとルフィはすごい獲物でも捕まえたように喜んで向こう側に走り去り、他の子どもたちにペンを見せびらかせていました。ルフィの後姿を見ながら、「しまったなぁ」と後悔の念に駆られました。あれは「ペンちょうだい」という意味なのでしょう。気づくの遅ッ。

不用意にかつひとりにだけ物を与えるのは、国際協力を専門にやっている人から見れば、おそらく「まずいこと」に該当します。物資援助ひとつ例にあげても、貧しい人に物を与える際はある程度の数を用意した上で、が当たり前だからです。「ひとりだけにあげる」というのが、「もらえないその他大勢」の恨みやねたみを買ってしまうかもしれません。無責任な好意が事態を悪化させてしまう可能性があるのです。しかし、なにもせず村を後にすることが果たしてよいことだったのでしょうか。

マザーテレサはノーベル平和賞受賞の際のスピーチで “If you can't feed a hundred people, then feed one. (もし百人に食べ物を与えられないなら、ひとりに与えなさい)” と言いました。何も行動を起こさないことが、状況を好転させることはありえません。事態を悪化させるかもしれないということを引き受けた上で、それでもなにか自分に出来ることはないか模索する「覚悟」が必要なのではないのでしょうか。

仮にペンを渡してしまう前の時間に戻ることができるとしても、やはり私はもう一度ルフィにペンを一本差し出したように思います。それが本当に当人のためになるの

かはわかりませんが、それでもペンを差し出すことが私にできる精一杯の国際協力なのです。

<最後に>

人生に与える影響には二種類あると思います。ひとつは、机で勢いよく張り倒されるような衝撃的な影響。もうひとつは、毒が回るように、ボディーブローが効いていくようにじわりじわりと当人の振る舞いや生活に影響を与える影響（どれもたとえば良くありませんね）。

恐らく、今回のスタディーツアーで受けた影響は後者の「毒」に該当すると思います（たとえば悪くてたびたびすみません）。今後の私の人生は、スタディーツアーの影響をうけてさまざまに変化するでしょう。「毒」とは「いつの間にか回っていた」というものですから、スタディーツアーで得た数々の経験は私の暗黙知として沈み込み、人生の岐路に立たされ選択を迫られたときの振る舞いに目には見えない影響を与えるものなのでしょう。

その影響で何が変わるかは今の段階では断定できませんが、とりあえず、インドネシアにはもう一度行ってみたいと考えています。